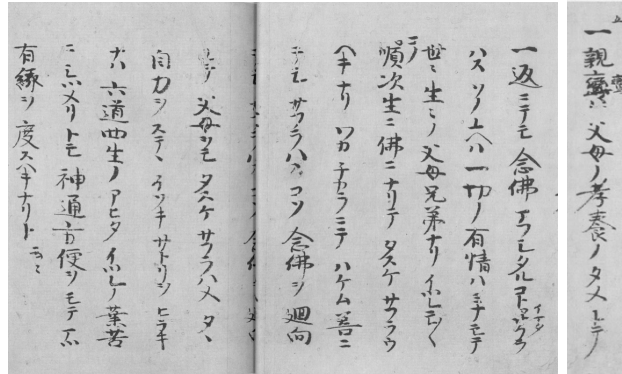


副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第7回（通算第27回）

第五章——ただ念仏と回向（2）

加来 雄之



『歎異抄』第五章（蓮如本・加来試訳）

『歎異抄』第五章	加来試訳（安良岡訳を参照）
一五 ①親^{*1}鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念佛まふしたること^{*2}いまださふらはず。 ②そのゆへは、一切の有情はみなもて世に生れの父母兄弟なり。 ③いづれも／＼^{*3}この順次生に佛になりてたすけさふらうべきなり。 ④わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ。 ⑤たゞ自力をすてゝ、いそぎ^{*4}さとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり。と〔云ふ〕。	第五章 【(1) 主題】 ①「〔私、〕親鸞は、父母の<u>追善供養</u>のために〔なるのだと考えて〕、一返であつても念仏を申したことは、まだございません。 【(2) 理由】 ②その理由は、すべての情けあるものたちはみなすべてが、次々の世に生まれ変わり、死に変わる父母であり、兄弟なのである。 ③どなたもどなたも、この生の次の生で、仏になって、助けることができるのです。 ④わが力ではげむ善行でもございますならば、念仏を廻らし向けて、〔亡き〕父母をもお助けしましょうけれど、 ⑤ただ〔ひたすら〕自力を捨てて、いそいでさとりをひらいてしまえば、六道や四生〔という迷いの世界に流転する〕中において、どのような〔前世の〕業〔の報い〕による苦しみに沈んでいたとしても、神通力やさまざまな手だてによって、まず〔第一に〕縁あるものを度すことができるのです。」 と〔故親鸞聖人は〕教えてくださいました。

【校訂】

- *1 「鸞」を書きかけ鳥を山となずり訂記、さらに右に「鸞」と訂す
- *2 右行間に「いまだ」三字を補記
- *3 右行間に「この」二字を補記。
- *4 「さとり」——（永）「浄土のさとり」

はじめに

- ・日本人の宗教意識（心性）と第五章
- ・死者をどのように受けとめるか。「物語的現実」？

I 前回の復習

①親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念佛まふしたることいまださふらはず。

- ・『歎異抄』の師訓篇の文脈における第五章の位置づけについて。

II 第五章の構造について

①主題には、行についての二つの要素が含まれている。一つは「父母の孝養」であり、もう一つは「念仏まふす」である。私たちににとって切実なる「父母の孝養」という問題を例として、他者を利益するという課題をどのように受けとめればよいのか、その利他の問題が「ただ念仏」の立場から答えられるのが第五章であろう。

父母の孝養とは、私たちが生まれてきた事実を深く受けとめるためには不可欠な感情を扱っている。

親鸞は	そのゆえは		
父母の孝養のためとて、〔一返にても〕	②一切の有情はみなもて世に生るの父母兄弟なり。	③いづれも／＼この順次生に佛になりて	<u>たすけさふらうべきなり。</u>
一返にても念佛まふしたることいまださふらはず	④わがちからにてはげむ善にてもさふらはじこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ。	⑤たゞ自力をすてゝ、 <u>いそぎさとりをひらき</u> なば、	六道・四生のあひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもて、 <u>まづ有縁を度すべきなり</u>

III 本文拝読

② そのゆへは、一切の有情はみなもて世に生るの父母兄弟なり。

②その理由は、すべての情けあるものたち（＝生きとし生けるもの）はみなすべてが、次々の世に生まれ変わり、死に変わる父母であり、兄弟なのである。

- ・ここからは①主題の理由を説明する。
- ・「そのゆえは」はどこまでかかるのか。

- (ア) ②まで …父母兄弟なり。
- (イ) ③まで …たすけそうらうべきなり。：石田説
- (ウ) ④まで …たすけそうらわめ。
- (エ) ⑤まで …度すべきなり、：『聞記』

└ 「一切の有情は……たすけさふらうべきなり」
 そのゆへは└
 └ 「まづ有縁を度すべきなり」

・「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟」

・第四章では「衆生」とあったが、ここでは「一切の有情」と表現される。「衆生も有情もともにインド語のサットバの訳であるが、古訳は「諸天・人民・蜚飛・蠕動の類」(『聖典』(第2版)171頁)、旧訳では「衆生」、新訳では「有情」と訳される。親鸞は、いずれも引用する。またみづからの文でも旧訳と新訳を併用している。「一切の有情」とは、「一切衆生」のこと、『大経』では「十方衆生」、「諸有衆生」を意味する。この「一切」という全称がすべての在り方を例外なく含める意味をもつ。「衆生」は衆多の生の在り方をもつものという外面から、「有情」は生類みづからの内面の心意を指さすイメージをもって使用されるのであろうか。この「一切の有情」という表現には、この世における我が父母だけの孝養とする感情に対して、我執(エゴ)やそれによる差別の意識をこえて、一切の存在を平等に見ていくという仏法の真理に立って、それでよいのかと問いかけがあるようである。

・「世々生々」とは、世をかえ生をかえて流転するという意味。その意味では、「衆生」では意味が重複するのであろう。「父母兄弟なり」という表現は親しい他者を連想させる。

・親鸞『教行信証』

仏経に言わく、「識体、六趣に輪回す。父母に非ざる無し。生死変易す。三界、熟か怨親を弁えん。」又言わく、「無明、慧眼を覆う。生死の中に来往す。往来して、之、所作す。更に互いに父子たり。怨親、数しば知識たり。知識、数しば怨親たり。」

(「化身土巻」、『弁正論』、『聖典』(第2版)454頁)

・『心地観経』

有情輪回して六道に生ずる。猶し車輪の始終なきが如し。或は父母となり男女となる。世生生互いに恩あり(『心地観経』)

③ いづれも／＼この順次生に佛になりてたすけさふらうべきなり。

③ どなたもどなたも、この生の次の生で、仏になって、助けることができるのです。

・「いづれも／＼」とは誰か。

(ア)→「この順次生に仏になりて」救われる存在：広瀬「一切の有情」

(イ)→「たすけさふらうべきなり」仏になって救う存在

・「この順次生に仏になりて」というのは、「順次生」は、まず我々が今生で仏になることへの断念が背景にある。『歎異抄』第十五章に、「真言・法華を行ずる浄侶、なおもて順次生のさとりをいのる」(蓮如本『歎異抄』、『聖典』(第2版)779頁)とあり、『歎異抄』では、順次生に仏になることもしくはさとりを求めるのは、聖道門の人々のあり方として語られている。また同じ第十五章に「浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土のしてさとりをばひらくとならひさふらうぞ」とあるが、「順次生に」と「かの土にして」は同じ意味であろうか。「この順次生」の証果としてあらわそうとしていることはな「成仏」か「往生」か¹。

└「順次生に仏になりて」「順次生のさとり」

「順次生」┐

└「順次の往生」「順次生に浄土にうまれて」

また第十二章には、「あやまで学問して名聞・利養のおもひに住するひと、順次の往生いかがあらんずらんという証文もさふらうべきや」(蓮如本、『歎異抄』、『聖典』(第2版)733頁)とあり、また親鸞の消息にも「その御ころざしにては、順次の往生もかたくやそうろうべからん。」(『親鸞聖人御消息集(広本)』、『聖典』(第2版)692頁)とあるが、これらは順次の往生であってさえもというニュアンスで、積極的な意味で使っているようにはおもえない。

・「佛になりてたすけさふらうべきなり」と断定している。「一切の有情」を仏に成って平等にたすけることがすべての大乘の仏道の究極の目的であるからであろう。

・「たすけさふらうべきなり」と「度すべきなり」との区別をどのように考えるか。

・ちなみに藤秀翠は、明恵上人と親鸞聖人は宗教的立場においては対蹠的な位置にあるが、追福とか祈祷という思想に対しては同一の態度をとったとことを指摘して、以下の文を引用している。「我は朝夕一切衆生の為に祈念し致し候えば、定めて御事もその数の中にましまし候らん。されば別して祈申べきにあらず……平等の心に背きて御事計り祈候らんには、親疎あるに似たり。……」(喜海『梶尾明恵上人伝記』下巻)(藤秀翠『歎異抄講讃』「第九講 廻向」323頁)

④ わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふ

¹ 『唯信鈔』には、「浄土門というは、今生の行業を回向して、順次生に浄土にうまれて、浄土にして菩薩の行を具足して、仏にならんと願ずるなり。この門は末代の機にかなえり。まことにたくみなりとす。ただし、この門に、またふたつのすじ、わかれたり。ひとつには諸行往生、ふたつには念仏往生なり。」(『唯信鈔』、『聖典』(第2版1094頁)とあり、順次生に浄土にうまれるのは、今生の行業(父母孝養をはじめとする諸行・阿弥陀仏の名号ととなえること)を回向することが前提とされる往生である。

らはめ。

④わが力ではげむ善行でもございますならば、念仏を廻らし向けて、〔亡き〕父母をもお助けしましょうけれど、

・「わがちからにてはげる善にてもそうらわばこそ、」は「自力」をあらわす。ここでは「父母の孝養のため」に「念仏まふ」すことが、「念仏を回向して父母をもたすけ」ようという立場として確かめられ、この立場が、⑤の冒頭で「ただ自力をすてて」と「ただ」「すて」るべき自力の立場とされる。このような「念仏まふす」ことの押さえ方は、第二章において「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という「よきひとのおほせ」として示され、第四章で「念仏まふすのみぞすえとをりたる大慈悲心にてさふらうべき」と確かめられた「ただ念仏」という他力の立場に対する誤解である。

・「たすけさふらうべきなり」であるが、「たすけさふらはめ」（「助けましょうけれども」の意となる。「こそ…め」の形は、いわゆる強調逆説法で、下へ続く文法である。」（安良岡）

・「念仏を回向して」の「回向」はインドの言葉でパリナーマであるが、親鸞の思想におけるもっとも重要な概念である²。にもかかわらず『歎異抄』ではただ一回、この第五章に自力の行としてしか出てこない。それはなぜだろうか。

このことはこればでも述べてきたように『歎異抄』が源空聖人の『選択本願念仏集』の教義のもとにあること、回向でいえば「不回向」という思想を受けていることをあらわしている。先人が指摘するように、法然は自力の回向を否定した。しかし回向という事実がないのではない。親鸞の回向は、他力（如来の本願力）回向である。周知のとおり、親鸞は第十八願成就文の「至心廻向」を「至心に回向して」と読まずに「至心に回向したまえり」と読まれた。

ちなみに親鸞に念仏によって善を他に回向するという思想がないと断言できない。

「南無阿弥陀仏をとけるには 衆善海水のごとくなり

かの清浄の善身にえたり ひとしく衆生に回向せん」

（『高僧和讃』曇鸞和尚、『聖典』（第2版）607頁）

⑤ たゞ自力をすてゝ、いそぎ*4さとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり。

⑤ただ〔ひたすら〕自力を捨てて、いそいでさとりをひらいてしまえば、六道や四生〔という迷いの世界に流転する〕中において、どのような〔前世の〕業〔の報い〕による苦しみに沈んでいたとしても、神通力やさまざまな手だてによって、まず第一に縁あるものを度すことができるのです、と教えてくださいました。

・「ただ自力をすてて」。この「ただ」という具体性が第八章では次のように表現される。「念

² 「凡そ回向の名義を釈せば、謂わく、己が所集の一切の功德を以て、一切衆生に施与したまいて、共に仏道に向かえしめたまうなり」と。（証卷引用、『浄土論註』、『聖典』（第2版）270頁）

仏は行者のために、非行非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして、自力をはなれたるゆへに、行者のためには非行非善なりと云々」（『歎異抄』第八章、『聖典』（第2版）770頁）

「ただ自力をすてて」とは、如来のはたらきに帰入した存在は、自力を立場としないということであり、自力がなくなるわけではない。

如来の回向に帰入して 願作仏心をうるひとは

自力の回向をすてはてて 利益有情はきはもなし

（『正像末和讃』、『聖典』（第2版）612頁）

またよく誤解されるのが、「ただ自力をすてる」「自力をはなれたる」ということは、努力をしないという意味ではない、努力によって価値を高めて仏になるという立場をすてることである。人生を与えられたただ一回のものとして仏の智慧に照らされて精一杯生きていくことが他力である。みずからの知力や能力によって仏になるのではなく、大悲の名号に目覚めてブツダになるという身の依りどころの転換が自力をすてるということであろう。

・「いそぎさとりをひらきなば」

・蓮如本の「いそぎさとりをひらきなば」と永正本の「いそぎ浄土のさとりをひらきなば」との異なり。「浄土のさとり」といえば、順次生のさとりのために今生に「かならず仏となる証しをえる」ことが課題となる。浄土と聖道のさとりが対比されて、浄土のさとりの独自性がはつきりとなるのだが、蓮如本では「浄土の」がないことをどのように考えるか。第四章でも「いそぎ仏になりて」とあることに対応すれば「いそぎさとりをひらきなば」という表現でよいと思う。「いそぎさとりをひらきなば」は、仏教の究竟の涅槃の境地にいたることを示している。「いそぎさとりをひら」くことは、親鸞の著述では以下の「かならず大涅槃のさとりをひら」くという表現にあたるのではないだろうか。

「超」は、こえてという。生死の大海を、やすくよこさまにこえて、無上大涅槃のさとりをひらくなり。信心を浄土宗の正意としるべきなり。

（『尊号真像銘文』、『聖典』（第2版）652頁）

如来の御ちかいを、ふたごころなく信樂すれば、撰取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまうは、すなわち、りょうし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなどを、よくこがねとなさしめんがごとしと、たとえたまえるなり。

（『唯信鈔文意』、『聖典』（第2版）678頁）

「如」は、ごとしという。ごとしというは、他力信樂のひとは、このよのうちに、不退のくらしいにのぼりて、かならず大般涅槃のさとりをひらかんこと、「弥勒のごとし」となり。

（『一念多念文意』、『聖典』（第2版）656頁）

・永正本の「いそぎ浄土のさとりをひらきなば」という表現は、隆寛の表現が参考になると思

う。

この念仏もまたしかなり。諸教にきらわれ、諸仏にすてらるる悪人・女人、すみやかに浄土に往生して、まよいをひるがえし、さとりをひらくは、いわば、まことにこれこそ諸教にすぐれたりともいいつべけれ。

(隆寛『後世物語聞書』、『聖典』(第2版) 1114 頁)

されば、つみのきゆることも南無阿弥陀仏の願力なり。めでたきくらいをうることも南無阿弥陀仏の弘誓のちからなり。ながくとおく三界をいでんことも阿弥陀仏の本願のちからなり。極楽へまいりて、のりをきき、さとりをひらき、やがて仏にならんずることも、阿弥陀仏の御ちからなりければ、ひとあゆみもわがちからにて極楽へまいることなしとおもいて、余行をまじえずして、一向に念仏するを他力の行とはもうすなり。

(隆寛『自力他力事』、『聖典』(第2版) 1126 頁)

*ちなみに古語における「やがて」は「そのまま、引き続いて。すぐに、ただちに。すなわち」の意。

・「六道四生のあいだ、いずれの業苦にしずめりとも」、とあるが沈んでいるのは誰か。

「六道」は、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六つの迷いの境界であり、「四生」は、胎生・卵生・湿生・化生は迷いの生き物の出生の形態によって四種に分類したものであり、流転輪回するあり方を示し、その「あいだ」は、その領域のなかにあること、その領域のなかで「いずれの業苦にしずめりとも」は、業の報いによる苦しみに落ち込んでいたとしてもという意味であろう。では「いずれの業苦にしずめり」の主語は誰であろうか、「一切の有情」であろうか、それとも「いそぎさとりをひら」いた存在であろうか。先人には二通りの理解がある。例えば、金子大榮は、救われるべき対象である「一切の有情」であるとし、安良岡康作は一切の有情を救うべき「さとりをひら」いた存在であるとする。この理解は、次の「神通方便をもてまず有縁を度すべき」存在との繋がりをどのように理解するかによるのであろう。

・「神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり」

・「神通」は凡夫には量り知ることのできない不思議なはたらきで、まず思いだされるのは、『大無量寿経』の四十八願において国中人天の徳として誓われる第五願より第一〇願(宿命通・天眼通・天耳通・他心通・神足通・漏尽通)の六つの神通である。とくにその中の天眼通、宿命通・漏尽通)を三明という。またここでの「方便」とは、仏菩薩が迷いの衆生を真実の世界に近づけるためのたくみな手だてとしての善巧方便のことである。仏になったうえでの無碍自在な救済力をあらわす。つまり「六道・四生」が「煩惱の林、生死の園」であるならば、「正信偈」には、「煩惱の林に遊んで神通を現じ、生死の園に入りて応化を示す」とあることによって、救うべきあり方をするものが業苦に沈むといっている。

「神通方便をもって有縁を度す」のは、「いそぎさとりをひら」いた存在である。私たちと「いそぎさとりをひら」いた存在とはどのような関係なのであろうか。ただ、正信偈においても「遊んで神通を現じ」とあるように、「浄土のさとりをひらいて」神通方便で有縁を度す仕事をするものを「業苦に沈む」というような表現をとるだろうか。そのように考えると、金子の意見

のように「業苦に沈」んでいるのは衆生であると受けとる方が適切な気がする。

もしかすると、ここには「業苦にしず」む存在に二重の意味が託されているのかもしれない。

第五に出の功德を成就したまう。菩薩の出第五門というは、云何が回向したまう。心に作願したまいき。苦悩の一切衆を捨てたまわざれば、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故に、功德を施したまう。云何が回向したまう。心に作願したまいき。苦悩の一切衆を捨てたまわざれば、回向を首として大悲心彼の土に生じ已りて速疾に奢摩他・毘婆舍那・巧方便力成就を得已りて、生死園・煩惱林に入りて、応化身を示し、神通に遊びて、教化地に至りて群生を利したまう。即ち是れを出第五門と名づく。園林遊戯地門に入るなり。

(『入出二門偈』、『聖典』(第2版) 548 頁)

・「まず有縁を度すべきなり」は、これまで「孝養父母」→「一切の有情……たすけさふらうべきなり」→「まず有縁を度すべきなり」と他者へ向かう表現が展開していることに注目したい。

・この「有縁を度す」という表現は、曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』による表現であろう。

(17) 観音勢至もろともに 慈光世界を照曜し

有縁を度して(えんあるをわたす)しばらくも 休息あることなかりけり」

(48) 仏慧功德をほめしめて 十方の有縁にきかしめん

信心すでにえんひとはつねに仏恩報ずべし

(『讚阿弥陀仏偈和讃』、『聖典』(第2版) 572-573・577 頁)

長者卑賤の身となりて 経論仏像興隆し

比丘比丘尼とむまれても **有縁の有情**を救済せむ

(『皇太子聖徳奉讃』)

・『愚禿鈔』には『観無量寿経疏』の表現によって四有縁が立てられている。

・有縁という言葉にはどこか私たちの情に近いものが感じられる。私たちが愛着をもつ人がかならずしも有縁であるかどうかは分からないが、私のおもいはからいをこえて有縁のものから自分のふれた世界にともに出会っていくであろう。大悲は無縁であるけれども、というより大悲は無縁であるからこそ縁あるものは誰でもその世界に目覚めていく。

・ここでは、「たすける」が「**度す**」というより厳密な仏教のすくいを表す言葉にかえられていることに注目したい。『浄土和讃』国宝本には「有縁を度して」に「えんあるをわたす」と左訓があるが、この和讃の場合、わたすのは「慈光世界〈あはれみかなしむひかり〉」と表現されるさとりの世界、安楽浄土である。

結び

法然の思想と第五章の思想との関係

以下の法語には、『歎異抄』第五章の言葉遣いがほとんど含まれている。しかし法然の法語は念仏による父母孝養、なき人への念仏の回向を肯定しているように見える。この法語の思想と親鸞の第五章の思想とはどのような関係として受けとめればよいのだろうか。

法然の思想——『歎異抄』の思想——親鸞の思想

「一 <u>孝養の心をもてちちははをおもくしおもはん人は。まづ阿弥陀ほとけにあつけまいらすへし。わが身の人となりて往生をねがひ念佛する事は。ひとへにわか父母のやしなひたてたれはこそあれ。わが念佛し候功德をあはれみて。わが父母を極楽へむかへさせおはしまして。罪をも滅しましませとおもはは。かならずかならずむかへとらせおはしますんする也。</u> ……さ候へはのちの世をとふらひぬへき人候はん人も。それをたのますして。<u>われとはけみて念佛申して。いそき極楽へまいりて。五通三明をさとりて。六道四生の衆生を利益し。父母師長の生所をたつねて。心のままにむかへとらんとおもふへきに候也。</u>又当時日ことの御念佛をも。<u>かつかつ廻向しまいらせられ候へし。なき人のために念佛を廻向し候へは。阿弥陀ほとけひかりをはなちて。地獄餓鬼畜生をてらし給ひ候へは。此三惡道にしつみて苦をうくる者。</u>そのくるしみやすまりて。いのちをはりてのち。解脱すへきに候。大經にいはい。若在三塗勤苦之處見此光明皆得休息無復苦惱寿終之後皆蒙解脱といへり」 (法然『拾遺黒谷上人語燈録』大正蔵 83、254－254 頁)	一 親鸞は父母の孝養のためとて一返にても念仏まふしたることいまださふらわず。 そのゆへは一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれもこの順次生に仏になりてたすけさふらうべきなり。わがちからにてはげむ善にもさふらわばこそ念仏を回向して父母をもたすけさふらわめ、ただ自力をすてていそぎさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしずめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり、と。 [云々]
--	---

ここにわれら、このたびはじめて人界の生をうけたるにてもあらず、世生生をへて、如来の教化にも、菩薩の弘經にも、いくそばくかあいたてまつりたりけん。ただ不信にして教化にもれきたるなるべし。三世の諸仏、十方の菩薩、おもえばみなこれむかしのともなり。釈迦も五百塵点のさき、弥陀も十劫のさきは、かたじけなく父母師弟とも、たがいになりたまひけん。

(『西方指南抄』下末)